

「流れゆくものの賦」の巻 (故江連博追悼半歌仙)

起首 平成十四年二月二十三日

満尾 平成十四年四月 十九日

【表】

発句(春)	流れゆくものの賦のごと春の舟	晴生
脇 (春)	地ビール飲んで ^{ぬく} 温し ^{うみ} 湖行く	一爽
第三(春)	麗日やまた去来する人がいて	洋治
四 (雑)	富士山荘の思ひ出多し	幸
五(秋・月)	月白の山腹の灯もかすかなり	英史
折端(秋)	祭り ^{ぼやし} 囃子が坂のぼりくる	一爽

【裏】

折立(秋)	母の呼ぶ鳥が森に秋時雨	洋治
二 (雑)	想ひ再び夕暮れの寺	久枝
三 (雑)	那須の里舞ひ散るものを惜しみつつ	典夫
四(雑・恋)	長き黒髪指添えながら	晴生
五(雑・恋)	尼語る十五の恋の物語	芙佐
六 (雑)	空に白雲鳥の群れ見ゆ	節
七(夏・月)	夏の月銀河鉄道ごん狐	昭一
八 (夏)	帰省鞆に CD 四五枚	英史
九 (雑)	降り立ちし無人の駅に風一陣	一爽
十 (雑)	裏の里山夕陽に染まり	久枝
十一(花)	花見した山道たどる老夫婦	敏代
折端(春)	希望の明かり春の那須山	昭一

(留書き) 頁

表紙絵 江連 博 画

題 字 田中一爽 書

